

タイトル:平成 23(2011)年度 教育セミナー

日時:平成 23 年 9 月 17 日(土)~20 日(火)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「中央ユーラシア研究からの展望」

小松 久男(東京大学)

この講義では中央ユーラシアという新しい研究領域を紹介するとともに、中東イスラーム研究との接点、とりわけ比較や連関という方法上の可能性について、いくつかの具体例を提示した。

中央ユーラシア地域とは、ほぼ旧ソ連の中のムスリム地域と中国新疆とを合わせた地域をさし、歴史の基層において、ユーラシアの中央を貫く大草原の遊牧民とその南部に位置するオアシス地域の定住民との長きにわたる相互関係、イスラーム化とトルコ化の進展の結果としての文化、言語的な親近性、そして帝政ロシアとソ連がもたらした帝國的な秩序と新しい文明などの共通性を有している。さらに 1991 年のソ連という巨大な国家の解体がもたらした衝撃が直接、間接に及び、それと同時に新しい秩序の形成が試みられ、全体として現代世界の動向に大きな影響を与える地域と考えることができる。じっさい、この地域の安全保障や資源開発は、アフガニスタン問題とも密接に関係しながら、世界的な関心を集めている。

一方、研究の面から言うと、この中央ユーラシア地域は、ソ連解体とともにようやく研究の可能性が開かれた新しい地域である。日本ではそれ以前から東洋史学、なかでも中央アジア史や内陸アジア史という分野で前近代を中心とする研究が行われてきたが、この 20 年の間に\*イスラーム地域研究やアラブ・ユーラシア研究などと連携、共同する形で大きく進展してきた。中央ユーラシアという研究領域は日本のみならず、世界でもすでに認知された領域といってよい。

この中央ユーラシア地域の研究は、イスラームを媒介として中東イスラーム世界の研究と方法や課題においてさまざまな接点や共通性をもっている。具体的な事例として、この講義ではまず近代ロシアに生まれたイスラーム改革思想を代表する人物としてガスプリンスキー(1851-1914)を取り上げ、その思想の特徴(教育改革への強い志向、ロシアとイスラーム世界との連携構想、ユートピア小説による啓蒙な)とアラブ知識人カワーキビー(1854-1902)との世界ムスリム会議構想における連関などにふれた。

次にソ連時代のイスラームについて概観した上で、1970 年代末に生まれた革新派の潮流とその過激化の過程をたどり、このサラフィーヤ的な潮流の背景にはソビエト文明と中東・南アジアのイスラーム復興思想のインパクトの双方が認められることを指摘した。中央ユーラシアに復興したイスラームが、その多様性を含めてどこに向かうかは重要な問題であり、これを検討するには中東イスラーム研究がこれまでに蓄積してきた成果を積極的に学ぶ必要があるだろう。

イスラーム地域研究については、下記を参照。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/>